

「腹が立つ」の動機付けに関する一考察

馬場 典子

キーワード 怒り、腹が立つ、認知言語学、メタファー、意識化

0. はじめに

本稿の目的は、馬場（2001）で扱った、怒りを表す動詞句（名詞（句）＋格助詞＋動詞）の一つである「腹が立つ」を、比喩の観点から考察しその動機付けを明らかにすることにある^(注1)。

海外では怒りの表現と比喩との関わりに関して、認知言語学の観点から分析された研究—代表的なものとしてはLakoff & Kövecses（1987）—があり、「怒り」に関する様々な表現—多くは慣用表現—は、ばらばらに存在するものではなく、一貫した概念構造を持つことが示されている。Lakoff & Kövecses（1987）は米語に関する考察であるが、近年は米語のみならず他の言語（日本語ではMatsuki（1995））においても分析がなされている。

「怒り」を表す日本語の表現には、身体部位語に関連した表現が多く見られる（「頭に来る」「腹に据えかねる」「はらわたが煮えくり返る」等）。「腹が立つ」もその一つである。では「腹が立つ」という表現が何故「怒り」として理解されるのだろうか。本稿では「慣用化した表現」とされてきた「腹が立つ」の分析可能性を示すことを主眼とし、それを改めて馬場（2001）で明らかにされた意味特徴と照らし合わせ、意味特徴の妥当性を再確認する。

1. 認知言語学的言語観とは

先行研究を概観する前に、それらの先行研究が依拠する「認知言語学」的言語観についてすこし触れておきたい。「認知言語学」的言語観は、従来、西洋を中心に支持されてきた「客観主義」的世界観とは根本的に異なる。「客観主義」とは、「思考、推論、言語をはじめとする知的な営みは「身体性」にかかわる要因とは独立した抽象的な記号の操作によって特徴づけられ、これに付与される意味は客観的に構築された世界、すなわち、認知主体としてのわれわれの解釈

から独立して存在する世界との対応によって捉えられる」(山梨(1998:21)、下線は引用者)とするものである。が、これに対し「認知言語学」では「統語構造、文法構造をはじめとする言語の形式的な側面は、認知主体の身体性と経験的な基盤を反映する意味的な要因や運用的な要因によって動機づけられている」((同:24)、下線は引用者)とする立場をとるものである。つまり、認知言語学では、外界を「我々から独立して(客観的に)存在しているもの」ではなく、「我々の認知—知覚・感覚・身体的社会的経験・イメージ形成・カテゴリー化など—によって捉えられたもの」と考えるのである。

2. 先行研究概観

2-1. レイコフ(1993)らによる一連の「怒り」の研究(Lakoff(1987)、Lakoff & Kövecses(1987)^(註2)、Kövecses(1986, 1990))

Lakoff & Kövecses(1987)はレイコフ&ジョンソン(1986)が示した、「メタファーによって理解可能な表現を体系化するための手法」を用いて、「感情」の概念構造を考察した。レイコフ&ジョンソンの手法とは、ある概念領域を他の概念領域へと写像(mapping)することで理解する—その写像の結果生じた概念間の対応を「概念メタファー(conceptual metaphor)」と呼ぶ—手法である。レイコフらは、この手法で「身体」という具体的な概念領域(起点領域)を「感情」という抽象的な概念領域(目標領域)に写像することで、一見概念構造を持っていないかに見える「感情」を構造化しようと試みたのである。

レイコフらは「心理テスト」によって身体的な症状と感情の関係(どの様な感情が原因で、どの様な生理的変化が結果として起こるか)^(註3)を調べ、そのデータを基に多くの「生理的メトニミー」を立てている。以下に「怒り」を表す「生理的メトニミー」の例を示す。

(ウンゲラー&シュミット (1998:163) 図3. 7より一部引用)

生理的効果 (起点)	感情 (目標)	例
体温の上昇 顔と首の周りが赤くなる 心拍、血圧の上昇、動悸 一般的な身体的興奮	「怒り」	Don't get hot under the collar. (カッカするな。) She was flushed with anger. (怒りで真っ赤だった。) His heart pounded. (心臓がドキドキした。) He almost burst a blood vessel. (血管が破裂しそうだった。) She was quivering / excited / keyed up / overstimulated. (震えて／興奮して／緊張して過度に刺激を受けていた。)
一般的な身体的興奮	「怒り」	She was quivering / excited / keyed up / overstimulated. (震えて／興奮して／緊張して過度に刺激を受けていた。)

2-2. 「生理的メトニミー」の限界—ウンゲラー&シュミット (1998)

前節で見たレイコフらの「生理的メトニミー」について、もう少し見ておくことにしよう。ウンゲラー&シュミット (1998) は生理的メトニミーの可能性も指摘しながら、以下の点が最も問題だとする。

最も深刻な問題は、多くのメトニミーがひとつあるいは緊密に関連している少数の感情にだけ当てはまるのではなく、非常に多岐にわたる感情にも当てはまるということである (この体温の上昇は「怒り」においては気にさわるものであるが、「喜び」においては心地よい暖かさであり、「愛」においては両方が可能である)。これら三つの感情はみな顔を赤くする。(中略) 心拍数の上昇と動悸は「怒り」、「恐怖」、「嫌悪」そしてまた「愛」に見られる。
(p.164)

つまり、「顔の赤み」や「体温の上昇」は複数の感情カテゴリーにまたがってみられる生理的的症状であり、決して「怒り」に特有のものではない^(註4)。よって「生理的メトニミー」は「怒り」を概念化する際の素因の一つとして用いられる可能性はあるが、「怒り」を強力に動機付けるものではないと思われる。そしてどの程度「生理的メトニミー」が動機付けとして有効かは、個々の表現形式によって異なると考えられる。

2-3. 生理以外の要素の必要性 (Kövecses (1995)、Matsuki (1995))

Kövecses (1995: 184) は、自己の一連の研究 (1986, 1990等) では、「英語における怒りの「容器メタファー」についての我々の説明を、生理基盤の説明と同定し、一括して性格づけることは誤りであり、この説明は、「身体化 (embodiment)^(注5)」の問題が怒りの概念についての我々の理解において役割を果たす程度に応じてのみ生理基盤の説明と言える」(p.184) と述べている。また「文化歴史的背景」に興味が薄かったことも認めている。

Kövecses (1995) は、2つの異なる予測である①「文化が違っていると、感情語も異なる」②「文化の違いに感情語は左右されない」を検証するために複数の言語データ—英語・中国語・日本語（日本語についてはMatsuki (1995) を採用）・ハンガリー語・タヒチ語・ウォロフ語—を調べ、「感情の概念化とその表現を決定しているのは文化的歴史かそれとも生理か」について考察した。その結果、「欧米文化とかなり異なった文化を持つと思われる言語共同体も概して同じ生理基盤を持つ」とし、生理普遍性を示唆している。しかし、各文化によって「身体化 (embodiment)」の仕方はかなり異なっている場合があり、よって Kövecses は「怒りの概念化には文化と生理の双方が影響している」(p.195) と結論づけている。また Matsuki (1995) もレイコフらの手法に倣い、日本語の怒り表現の分析を試みているが、日本語には米語と同じ様に概念化できるものできないものがあるとし、後者の例に「腹が立つ」を挙げている。そして「腹」に「隠された真実—本音—を入れる容器」(p.143) という解釈を施し、生理以外の（社会文化的）要素が加わっていることを示している^(注6)。

以上の様に2つの先行研究は、生理基盤で怒りの概念化を試みたレイコフらの一連の研究に、さらに社会文化的観点からの考察の必要性を提示している。特に Matsuki の「腹が立つ」についての言及（「腹」+「立つ」に分けて考察している点）は、従来「腹が立つ」が慣用度の高い（固定化した）表現であり、分析不可能だとされていた考えとは異なるものである。

3. 「腹が立つ」の分析可能性

本節では先行研究を踏まえて、「腹が立つ」について以下のことを見ていくことにする。

- ① 「生理的メトニミー」は動機付けとなっているか。
- ② Matsuki (1995) が示唆した「「腹」+「立つ」」の分析がどこまで可能なのか。またそこに関わる動機付けは何か。

また、考察の結果を4節で馬場（2001）で得た「腹が立つ」の意味特徴と照らし合わせ、改めて「腹が立つ」の意味特徴を確認する。

3-1. 「腹が立つ」の分析

冒頭で既に述べたが、従来の研究では、専ら「腹が立つ」は「慣用的に固定化した怒りを表す表現」として扱われ、管見の限りではその分析可能性について（Matsuki（1995）を除いて）論じられているものはない。山梨（1995：76）は「腹が立つ」の様な比喩表現を、「慣用化の過程を経た死喩（*dead metaphor*）」と読んでいる。「死んでいる（*dead*）」とはウンゲラー&シュミット（1998）が述べている様に「比喩の意味が、ある言語形式と頻繁に結びつくことにより言語共同体の中で確立され、辞書の中にその語（または句）の意味のひとつとして採録される」（p.143、括弧内は引用者による補足）ことを指すが、山梨は「腹が立つ」がなぜこれがメタファーと認められるのかについては言及していない。その動機付けを探るにはまず「腹」がどのような意味を持つのか、それが「立つ」と結びつくと何故「怒り」の表現となるのかを考える必要がある。

3-1-1. 「腹」—「容器」としての側面の焦点化

ではまず「腹」とはどんな意味があるのだろうか。現行辞書（『大辞林』第二版）の記述を見ると、基本義が3つに下位分類されている。

はら「腹」①㊦動物の体で、胴の下半部。哺乳類では胸腔と骨盤の間にあって、胃や腸などの内臓を収めるところ。

①消化器、ことに胃腸。

㊦母の胎内。

（『大辞林』第二版、p.2112より要約、下線は引用者）

以上の記述から、「腹」とは「胃腸」という具体的な消化器の意味もあるが、それとは別に「内臓を収める場所」として捉えられていることがわかる。これはつまり「捉え方」の問題で、「腹」を「消化器」と捉えた場合は、その「機能」—すなわち消化—としての側面が焦点化される。一方、「腹」を「場所」と捉えた場合は、「腹」の「容器」としての側面が焦点化されるのである。そしてこれから考察しようとしている「腹」はこの後者に当たるのだが、「消化器官」としての意味も決して失われている訳ではないと思われる（詳しくは後述）。

3-1-2. 本稿における「腹」の措定

日本語の感情を表す表現には、身体部位を含んだものが多く見られる。その中でも「怒り」を表す表現には「腹」がよく使われる。具体的には以下の様な

表現がある。

「はらだちがお（腹立顔）」「はらだちごえ（腹立声）」「はらだちなみだ（腹立涙）」「はらが立つ」「はらを立てる」「こぼらが立つ」「こぼらを立てる」「むかっばらが立つ」「むかっばらを立てる」「うすばら（薄腹）が立つ」「はらが癒える」「はらを癒す」「はらが居る」「はらを居る」「はらいせ（腹癒）」「はらを据える」「はらに据えかねる」「はらが煮える」

（佐竹（1984：18-28）より引用者が抜粋^(注7)）

では「怒り」に「腹」を用いる動機付けとは何か。それにはまず「腹」がどの様に捉えられているかについて考えてみる必要がある。

では実際に「腹」についての言及を見てみよう。土居（1971）は「腹」について以下の様に述べている。

「はら」の意味を考えてみよう。体の「腹」は元来物がたまるところであるが、それと同じようにこの言葉が精神的な意味に使われる場合は、経験の蓄積、または経験の集大成としての自己、したがって容易にその中を人の眼に見せないものを指して「はら」というように思われる。「はらができて」「はらが立つ」「はら黒い」といった表現はその意味をよく表しているといえるであろう。（p.111、下線は引用者）

ドイツの哲学者であるデュルクハイム（1990）もまた、日本語において「腹（肚）^(注8)」が重要な役割を果たしていると述べている。

日本人が「肚」という言葉で考えることは、人間の性格や生活を規定するものの本質的な点である。肚は身体の中央であると同時に、精神的、詳しく言えば自然精神的意味での人間の中心である。肚や肚を巡る言い回しは、人の全人格に、人格の基本的性質に、したがって全体の心身状態に、さらには真の心身状態が依存し、それが表現される精神的特色の特徴に關しているのである。（p.39より引用者が一部要約、下線は引用者）

土居とデュルクハイムの記述は概ね「腹」が精神的意味に用いられた場合は、「精神的研鑽を積んだ内的自己」を表す」ということだと言える。そしてデュルクハイムが「腹」を身体のみならず精神的意味においても「人間の中心」という場所と捉えている点から、「腹」を「精神的研鑽を積んだ内的自己」が宿

る場所」と考えてよいと思われる。また土居は「腹」を「元来ものたまるところ」と捉えており、これはつまり「消化物が入っている場所」を意味する。これは上で見た現行辞書の意味記述における㊦と㊧の両方にまたがる解釈であろう。

以上の点から、本稿における「腹」とは「精神的研鑽を積んだ内的自己」が宿る場所」と措定する^(注9)。

3-1-3. 「腹」と「立つ」の結合と「怒り」の動機付け

前節では、本稿における「腹」を措定した。ではこれを「立つ」と組み合わせるとどの様になるのであろうか。この点に関する記述に、竹内(1988)があるので見てみよう。

七四年の暮れ、私ははじめて「立つ」という日本語の意味を知った。大野晋氏の『日本語をさかのぼる』を読んでいてわたしはぎょっとした。「立つ」は横に寝ているものを垂直にすることではない。火が立つ、煙が立つ、雲が立つ、と言う様に、何も無いところに、動くものがあり、やがて姿を現わして、むくむくと上へ登ってくるのだ、と言う。とすると、「腹が立つ」のは「おさまって」平静だった腹の底から何か動き突き上げてくるから「立つ」なのだ。 (p.284、下線は引用者)

竹内は「腹」そのものについては意味を規定していないが、「腹が立つ」という状態を「平静な状態が何かによって突き動かされる」と述べている。また大野の「立つ」の意味は「ある現象が生起していない状態から生起した状態になる」ことであると言える^(注10)。

上で措定した様に、「腹」とは「精神的研鑽を積んだ内的自己」が宿る場所」である。それが「立つ」ということはどういうことなのだろうか。

ここでさらに考えてみたいのは、「立つ」前の「腹」の状態である。この冷静な状態を指した、何か特別な表現があるだろうか。その答えは「ない」。つまり、平常な状態は特別言語化されていないのである。例えば「腹が収まる(冷静になる)」は、「冷静でない状態から冷静さを持った状態になること」を表しているものであり、冷静な状態そのものを表すのではない。これとは別に一感情の領域とは離れるが一、感覚を表す「腹が減る」「腹がいっぱい」も同様と言える。「胃の中の食べ物が消化されてほとんどない状態」のことを「腹が減る」と言い、逆に「胃の中に食べ物がたくさん詰まった状態」を「腹がいっぱい」と言う。そして「胃の中の食べ物が多くもなく少なくもない普通の状態」はやは

り言語化されない。この様にプラスでもマイナスでもない「中庸」の状態というのは、通常ほとんど意識されないでいる（「腹は普通だ」とは通常言わない）が、この状態に変化が起きると、そこでその状態は「変化」として捉えられ、はじめて意識化されるのである。

以上の点を「精神的研鑽を積んだ内的自己」が宿る場所が意識される時について考えてみよう。それは以下の様に説明できる。何事も起こっていない状態では「腹」は中庸の状態であり、意識されずに身体の中に存在している。それが「意識化」されるには、外界で起こったある事態が「腹」に抵触する様な事態、すなわち内的自己にとって許容しがたい事態である必要がある。「内的自己」にとって「事は意にそぐわない」「自己の常識から言って考えられない」様な事態が起こったとき、それまで意識されなかった「腹」が目覚め、強く意識される。その状態こそが「腹が立つ」（すなわち怒りを生起させている）状態なのである。

そしてここでの考察は以下の様にまとめられる。「雲が立つ」「さざ波が立つ」の様に「目に見えない状態から知覚される状態になること」と「腹」—「精神的研鑽を積んだ内的自己」が宿る場所—が「ある事態への反発によって「意識化」される状態になること」の類似性によって「腹が立つ」が怒りの表現と理解される。つまり、「自然現象」という具体的な概念領域（起点領域）を「怒り」という抽象的な概念領域（目標領域）に写像することで理解しているのである。これは前に述べた山梨（1995:76）の指摘—「腹が立つ」は「死喩（dead metaphor）」である—の裏付けにもなると思われる。

そしてもう一つ動機付けの可能性として考えられるのは、先ほど少し触れた「消化器官としての「腹」」の意味の活性化である。前に消化器官としての「腹」の中の消化物が多くも少なくもない「中庸」の時は、「消化器官としての腹」は意識されず、「腹が減る」「腹がいっぱい（になる）」という「変化」が生じることによりはじめて「消化器官としての腹」が意識されることを述べた。この「状態の変化による腹の意識化」という具体的な身体的経験が「精神的研鑽を積んだ内的自己が宿る場所としての腹の意識化」にも、少なからず貢献していると考えられる。

3-2. 分析のまとめ

ここで3節で示した考察のポイントに即して、今までの考察を以下にまとめて記す。考察のポイントは以下の2点であった。

- ①「生理的メトニミー」は動機付けとなっているか。
- ②Matsuki (1995) が示唆した「腹」+「立つ」の分析がどこまで可能なの

か。またそこに関わる動機付けは何か。

①の「生理的メトニミー」に関しては、直接動機付けとは関わっていないことは明らかである。但し、前節で述べた様な「(消化器官としての) 腹の中の消化物の減少および増加」という生理反応(身体的経験)が「腹が立つ」の動機付けに貢献している可能性はある。そしてこの「生理反応」と「生理的メトニミー」とは決して無関係ではないと思われる。レイコフらが挙げた「生理的メトニミー」の生理症状は、「体温の上昇」「顔の赤み」といった、怒りの感情が原因で引き起こされる直接的生理反応である。これに対し、「腹が減る」「腹がいっぱい(になる)」という生理反応は、怒りが原因で引き起こされていないものの、その身体的経験が、間接的ではあるが「腹が立つ」の動機付けに貢献している。よって、「生理的メトニミー」と「腹が減る」等の生理反応は、感情との関係において直接・間接の違いこそあれ、「身体的経験」という共通項を持っていると言える。

②に関しては「腹」を「精神的研鑽を積んだ内的自己」が宿る場所」と捉える様な、少なくとも米語やドイツ語には見られない考えが日本語にはあり^(註11)、この考えが(文化に根ざしたものと結論づけるのは性急だが)、「動機付け」となり、この「腹」と「立つ」の結びつきが慣習化され、固定化された(怒りの)表現として確立されたと考えられる。確かに現在「腹が立つ」ことを「外界のある事態によって、精神的研鑽を積んだ内的自己の宿る場所が意識化される」ことと捉えて使用してはいない。しかし、結合が固く分析不可能と思われていた「腹」と「立つ」を敢えて分離して考察することで、少しではあるが分析の可能性が示せたと思う。

4. 「腹が立つ」の意味の再考

本節では馬場(2001)で明らかにした「腹が立つ」の意味特徴と、前節までの動機付けとの関連性について見ることにする。

馬場(2001)では「腹が立つ」に特有の意味特徴として以下のものを抽出した。

「ハラガタツ」

<心中の怒りの状態を専ら表す><「自分」を怒りの対象に取り得、内省的>

(p.204より一部引用)

まず「自分」を怒りの対象に取り得る点は馬場(2001)で分析した他の動詞(句)「頭に来る・むかつく」にはない、「腹が立つ」に特有の特徴である。馬場(2001)で使用した実例を以下に示す。

- (1) (和歌山市園部のカレー毒物混入事件で娘を亡くした鳥居芳文さん)「食中毒と言われたのを信じて、娘に十分なことをしてやれなかった自分に腹が立つ」と芳文さんは今も悔やむ。(1999. 7. 18『朝日』)
 - (2) (全国高校野球和歌山大会での向陽高校の有北選手の談話)「五回無死一塁で打席に立った。初球に犠牲バントを試みたが、ファウルになった。ベンチに向かって手を合わせてあやまった。きちんと決められない自分に腹が立った」。(1999. 7. 17『朝日』)
- (p.204、例文 (20) (21) を一部修正)

馬場(2001)では「「ハラガタツ」は「自分」を対象にし、自己への戒め(または内省に伴う怒り)として使うことが可能である」(p.206)と述べている。では何故それが可能なのかについて、動機付けの観点から再考察してみよう。

繰り返しになるが、「腹が立つ」こととは、「外界のある事態によって、精神的研鑽を積んだ内的自己の宿る場所が意識化される」ことである。この「外部のある事態」というのは常に自分と切り離された外部世界とは限らない。その「事態」には「自分自身が取った言動」も該当するのである。すなわち、「自分自身の取った言動」が「精神的研鑽を積んだ内的自己」により客観的な観察対象となる場合もあるということである。そしてその「言動」が「精神的研鑽を積んだ内的自己」から逸脱したものであった場合、その「内的自己」が意識化されると考えられる。つまり「腹」に「内的自己」が宿っていることにより、「言動を起こした自己」を観察対象化することが可能になり、結果として「自己」を怒りの対象に取り得るという説明が成り立つのである。また「自己」を観察対象として取り得るといふ言語事実から、腹に宿る「内的自己」が、何故精神的研鑽を積んだ自己であるかを考えてみると次の様に言える。「自己(の言動)」を観察対象として捉えられるということは、「(腹に宿る)内的自己」が冷静で事態を客観視できる様な状態になっていなければならないことを表す。言動を起こした自己に(その言動が妥当か否かの)判断を下せるのは「精神的研鑽を(程度の差はあれ)積んだ内的自己」というものが確立されている必要がある。

また「腹が立つ」の別の意味特徴である<心中の怒りの状態を専ら表す>については、動機付けと照らし合わせると次の様に言える。この意味特徴が何故

抽出できるのかは、3-1-3節で見た「それまで意識されなかった「腹」が目覚め、強く意識された状態こそが「腹が立つ」（すなわち怒りを生起させている）状態である」という点と重なる。つまり、「腹が意識化された状態」を「怒りを生起させている状態」として捉えることが、「腹が立つ」の意味特徴を支えていると考えられる。

5. おわりに

本稿では、慣用化が進み、これ以上分析不可能だとされてきた「腹が立つ」の動機付けの可能性を示した。そして「慣用化された怒りの表現」として「腹が立つ」を分析した馬場（2001）の分析結果と照らし合わせることにより、改めて意味特徴の妥当性が確認できたと思う。今後は馬場（2001）で扱った「頭に来る」をはじめ、他の身体部位語を含む「腹に据えかねる」「腸（はらわた）が煮えくり返る」の動機付けについて分析する予定である。そしてこれら身体部位語を含んだ動詞句と「怒り」との関係についてさらに考察を深めたいと考えている。また身体部位語を含まない表現（「きれる」「堪忍袋の緒が切れる」「むくれる」「ふくれる」「爆発する」等）についても考察を広げていきたい。

注

- (1) 馬場（2001）では直接感情表出表現（基本形単独で感情の表出が表せる）「腹が立つ・頭に来る・むかつく」のふるまいと意味特徴について記述した。その際「むかつく」に関しては比喩との関連性を指摘したが、「腹が立つ・頭に来る」と比喩との関連性については今後の課題として残された。本稿はその中の「腹が立つ」の動機付けに関する考察である。
- (2) レイコフ（1993）（Lakoff（1987））の「怒り」の事例研究は、Lakoff & Kövecses（1987）を基にしたものである。
- (3) 場合によっては「感情の生起」と「生理的症狀の生起」がほぼ同時に起こるという「同時性」に基づくメトニミーとも考えられる。この「メトニミー」とは、「二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて他方の事物・概念を表すという比喩」（舩山（1997：31））である。
- (4) 例えば「彼女は顔を真っ赤にした。」という文を単独で考えた（文脈から切

り離して考えた) 場合、想起されるのは「怒り」より「恥」であろう。図 3. 7 の例にもある様に、明らかに先の文を「怒り」として解釈するためには、「彼女は真っ赤になって怒った。」「怒りで真っ赤になった。」の様に、「どの感情によって赤くなったのか」を明示する必要がある。そして「彼女は顔を赤らめた。」の文に至っては、まず間違いなく「恥」を想起するだろう。この様に「顔の赤み」を例に取っても、それが「怒り」を強く動機づけるものとは言えないのである。

- (5) 「身体化 (embodiment)」とは、生理反応 (または生理的メトニミー) をメタファーの動機付けとして利用することである。
- (6) 本文で述べた様に Matsuki の「腹が立つ」の分析はレイコフらの手法に従っている。本稿ではレイコフの怒りの概念化の概略と「生理的メトニミー」について触れたが、具体的な怒りの分析内容については今後より詳細に検討する必要がある。よって本稿では Matsuki の「腹が立つ」の分析を詳しくは取り上げない。
- (7) 佐竹は「腹」を「はら」と表記しているため、表記は原文のままとした。
- (8) デュルクハイムは「肚」という表記を用いているが、本稿では表記を以後「腹」に統一する。しかしデュルクハイムの記述を引用する場合はこの限りではない。
- (9) この「腹」の意味はあくまでも「腹が立つ」の考察のための暫定的なもの (措定) である。「腹」の概念をより厳密にするには、「腹」を含んだ他の表現形式も広く検討し、「腹」の定義を行う必要がある。
- (10) 大野は「火」「煙」「雲」といった固体または気体を「立つ」ものとして例示しているが、当然「さざ波が立つ」などの様に「液体」に適用することも可能である。
- (11) 「腹」を特別な場所として認めている言語は日本語だけではない様である。井上 (1998) はゼンフトが調査したキリヴィラ語の身体メタファーの結果を引用し、キリヴィラ語においては「腹」(情報や呪文をしまっておく場所) と「のど」(「腹」にたまった呪文を、実際に音として外界に伝える場所) の持つ意味が西欧のそれとはかなり異なっている」(pp.118-121より引用者が要約、下線は引用者) ことを示している。この様にキリヴィラ語においても「腹」は重要な役割を担っているのである。しかし「腹」の捉え方は日本語の「腹」とは異なっている。

参考文献

- 井上京子 (1998) 『もし、「右」や「左」がなかったら—言語人類学への招待—』
大修館書店
- 大野 晋 (1974) 『日本語をさかのぼる』岩波書店
- 佐竹隆三 (1984) 『腹と胸—「身体言語」ものしり辞典—』第一書房
- 竹内敏晴 (1988=1975) 『ことばが劈かれるとき』ちくま文庫
- 土居建郎 (1971) 『甘えの構造』弘文堂
- 馬場典子 (2001) 「怒りの直接表出表現「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク」の意味分析」『世界の日本語教育』(日本語教育論集) 第11号
国際交流基金日本語国際センター pp.195-207
- 棚山洋介 (1997) 「慣用語の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』第80号 pp.29-43
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』ひつじ書房
- (1998) 「認知言語学の研究プログラム」『言語』Vol.27, No.11, pp.20-29
- Ungerer, Friedrich & Schmid, Hans-Jörg (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London/New York: Longman (ウンゲラー, F. & シュミット, H. - J. (1998) 『認知言語学入門』(池上嘉彦他訳) 大修館書店)
- Karlfried Graf von Dürckheim (1959) (2., Aufl.) *Hara: Die Erdmitte des Menschen*. München: O. W. Barth. (デュルクハイム, カールフリート (1990) 『HARA<はら>人間の重心』(下程勇吉監修、落合亮一他訳) 広池学園出版部)
- Kövecses, Zoltán (1986) *Metaphors of Anger, Pride, and Love: A Lexical Approach to the Structure of Concepts*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- (1990) *Emotion Concepts*. New York: Springer.
- Lakoff, George & Johnson, Mark (1980) *Metaphor We Live By*. Chicago/London: The University of Chicago Press (レイコフ, ジョージ&ジョンソン, マーク (1986) 『レトリックと人生』(渡辺昇一他訳) 大修館書店)
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press. (レイコフ, ジョージ (1993) 『認知意味論』(池上嘉彦・河上誓作他訳) 紀伊國屋書店)
- Lakoff, George & Kövecses, Zoltán (1987) “The Cognitive Model of Anger Inherent

in American English” , in Dorothy Holland & Naomi Quinn (eds.) ,
Cultural Models in Language and Thought . New York : Springer, pp.50–
68.

Matsuki, Keiko (1995) “Metaphor of Anger in Japanese”, in John R. Taylor & Robert
E. Maclaury (eds.) , *Language and the Cognitive Construal of the World* .
Berlin : Mouton de Gruyter, pp.137–151.

辞書類

松村明編 (1999) 『大辞林』 第二版. 三省堂